戦時下の母の年齢を越えて想うこと

黒澤良子（三山・55歳）

現在私は、定年を終えた夫と二人、それぞれに合った第二の人生を平和に暮しております。二人の子供達も親から離れ、自分達の道を一生懸命生きております。

平成元年の七夕の夜。ふるさと北陸の金沢で八十五才になる母が亡くなりました。

久しぶりに訪れたふるさとの生家は、古びてはいたものの、子供の頃と全く同じたたずまいでした。

母の安らかな死顔に逢った瞬間、様々な想いが頭の中を走馬灯のように去来しました。

それは、昭和十四年。当時の軍需工場の責任者として満州（現在の中国）の牡丹江に渡り、精力的に働いていた父は、日本本土の暮しが日に日に悪化してゆくのを知って、せめて小児マヒで足の不自由な弟だけでも連れて行くと言い、昭和十五年、未だ小学校にも通っていない弟を連れて再び満州に渡りました。

残されたのは女ばかりの何とも心細い家族になってしまいました。しかし、当時小学校二年生の私には、母の深い哀しみや、不安な気持ちは全く理解できませんでした。

思えば、あれから私も人の親となり、夫の何度かの転勤の際、単身赴任で子供達と三人暮しの体験をしましたが、不幸にして私が入院しなければならなくなり、子供達は、高校、大学と大きくなってはいたものの、何とも言えない心細さと不安な思いは、この平和な世の中にあった時でさえ言い尽くせぬものがあったことを想い出します。

さて、昭和十八年戦争が激しくなるにつれ、何が何だか判らないまま、叔父の勤めで片田舎の松任町（現在の松任市）の従兄の家に疎開することになりました。

当時は、一時間程かかる電車の中で、母は大量の吐血と下血をしました。二才年上の姉と私は、生きた心地もなく、周りの人に助けられ疎開先の家にたどり着きました。

心身の過労による胃かいようだったのです。

疎開先での暮しは、何処の家でも自分達が生きてゆくのが精いっぱいの、それはそれは厳しいものでした。まだ、よちよち歩きの一番下の妹の御飯の盛り方が多いと言っては、次の妹がよく泣きました。姉と私は、かろうじて空腹に耐えることができたのでしょう。自分は食べなくても、子供にはお腹いっぱい食べさせてやりたい、この母性本能さえも充たすことのできなかった母の切なさを想像する時、今、あふれるばかりの豊かさの中に、ともすれば感謝の気持ちも忘れ、おごりで充満した今の世の中を、どう考

えたらよいものかと、無邪気で可愛いい孫を抱きしめて、ふっと憂えることが度々です。

当時は、病人のいる家庭にだけ配給されるりんごをもらうため、姉と私は、周りの羨ましそうな目をのがれるように洋服の中にかくして、走って帰ったことを憶えております。

いよいよ日本本土への爆撃も激しくなり、毎夜のように空襲警報が発令され、いつでも避難できるように、セーラー服にモンペをはき、枕元には一番上等の革靴を置いて床につく毎夜でした。

昭和二十年、工場地帯であった富山市が大空襲にあいました。真夜中、皆が家の前に出て、真っ赤に染った空を恐怖におののきながらどこが焼けているのかもわからないまま、もう帰る家もないのだと思い、子供心にも言い知れぬ悲しい思いで大人達の泣くのを見ておりました。

ついには、広島に続いて長崎の原爆投下、たぶん大人達は何等かの情報で知っていたと思いますが、私達子供には何のことかわからないまま、天皇陛下の玉音を、近くのお酒屋さんのラジオで母と一緒にききました。大人達は皆泣いていました。母は、背中にかついだふろしき包みといっしょに、へなへなと土間に座り込んだのを憶えております。

幸い金沢は焼け残ることができ、親子五人は閉め切ってかびくさい我が家に帰ることができましたが、食べるものとてわずかな配給品だけ、マッチ棒までが一人何本と数えて配られたものでした。

それよりも何よりも、父と弟の消息の判らないのが家族の一番の不安でした。昭和二十三年、満州からの引揚げ船が舞鶴港に着くようになってから一年間の歳月を、今日こそは、今日こそはと父からの便りを待つ毎日でした。

待ちに待った父からの電報が届いた時、一番下の妹は紅い綿入れのてんま（生着）をすねまで出して着ていました。

「おとうちゃんが帰って来たら、一番先にたかいたかいしてもらうよ」と無邪気に言っていたのを想い出す時、現在、目の中に入れても痛くない三才の孫の姿と重なり合って、じーんと胸が熱くなります。

数日経ってからの便りで、父は満州で二年前に戦争にかり出され、未だ小学校一年生の弟は工場の従業員にあづけられたまま、別れ別れになってしまったことを知りました。

何便か遅れて弟の乗った船が入港しましたが、船内はしらみによる発疹チフスが広がって船から降ろしてもらえず、半月余り父は舞鶴の収容所に入れられていました。

そして「明日金沢に着く」との電報に一家は興奮の余り眠れぬ一夜を過ごしました。

翌日、母はいわしでもいいから何とかしてお頭付きの食卓でむかえてやりたいと、早朝近江町市場に出かけ、小さな小鯛を数匹、ようやく手に入れて来ました。

家に着いての父の第一声は何だったのか、そして小さな弟の母にかけたその言葉は・・・

夫婦、親子の情愛の深さを知り尽くしたともいえる現在の自分の年齢になってみて、想像することもできない切なさを戦争に対する怒りと共に身にしみて痛感いたします。そしてただひとつ、はっきりと頭の中に焼き付いているのは、小学校二年生の弟が一年の歳月をかけて引揚げて来る間に、自分の背丈以上あったという棒切れの杖がわずか腰のあたりしかなかったのを見て、母と姉が声をしぼって泣きながら弟を抱きしめていた姿です。

汚れるだけ汚れた上衣とズボンにぼろぼろのリュック、その中には途中で亡くなった従業員の遺髪が幾つか入っていました。

昭和四十七年「天皇陛下万歳」と、か細く叫んで優しかった父も七十三才で他界しました。

あれから苦節四十年—

そろそろ老いの年齢に入りかけた私達、姉弟妹もそれなりに恵まれた暮しが与えられている現在、まだまだ悲惨な体験をされた方達のことを思うと、有難いと思わなければなりませんが、子供達や孫達には二度とあのような恐ろしい悲しい思いはさせたくないと心から願う今日此の頃です。

そしてつい先日母の形見分けの着物と羽織りが送られて来ました。どれも母の若かった頃の戦争前の懐かしいものでした。

軍服姿が最も立派とされていた時代に嫁ぎ、姑に仕え、たくさんの子宝をもうけ、家の中だけの仕事に満足して生きて来たであろう母の半生は、苦労こそあれ心の中はきっと、充実したものであったのではないだろうかとしみじみ思われます。

これからの長寿社会を生きる私達も充実した日々を過ごすために、どうしたらよいものか、と考える時、ふっと「人はパンだけでは生きられるものではない」という聖書の一節が頭をかすめます。

ぼんやりと毎日を送っていた処へ、はからずも過去をふり返り戒めの機会をあたえていただけたことを、有難く感謝いたします。

終